こいけものがたり

善三郎翁記

(十二) 橋北財界の盛衰

旧富山市は旧神通川を境にして舟橋から南部を橋南、北部を橋北と呼んでいた。私は橋北（キョウホク）で生まれ育ち、そして現在も橋北地区に住んでいる、生っ粋な「橋北っ子」である。私の店は専門的に見れば、欅屋としては歴史も古いが、羽柄屋としては後発部隊に属した。しかし、一般住民からすれば材木屋である。

その橋北で昔から材木屋を営んでいた店の盛衰を掲げよう。船頭町＝石川材木店（大正年間に倒産）藤井町＝織田木材店（木材統制前に廃業）・福野材木店（木材統制前に廃業）、神通町＝池竹材木店（木材統制で廃業）・＊谷口製材所（現在呉羽で後継）・塚本製材所（昭和六年火災で廃業）・桶屋材木店（戦後倒産）・板倉製材所（木材統制で廃業）・金山製材所（昭和五十年代廃業）・城村材木店（昭和二十年代廃業）・＊小池木材店（現在木場町で小池木材として後継）、新富町＝＊森製材所（現在木場町で木場産業として後継）・丸二木材商行（木材統制で廃業）、桜町＝富山木材㈱（木材統制で解散）・丸サ製材所（木材統制前に倒産）、以上木材統制前迄に、十五社中＊印三社のみ現在営業継続中で、他の十二社は、倒・廃業した。（注＝現在平成十年では当社一社のみとなってしまった。）他に戦後になって、橋北地区で開業したもの、宝町＝小林材木店、桜町＝砂子田銘木店・田子銘木店であり、私が物心ついてから約六十年間位の間に、このような盛衰があった。

私は現在、私等の氏神様である愛宕神社奉賛会長を努めている。昨年（昭和五十五年）神社境内の御神苑整備事業を行った。神社の北側境界に新しく玉垣を新設奉納した。戦争中取り壊した一部の旧玉垣の処置に関して、協議の結果、南側に修理復元する事となった。

復元した玉垣に刻んである氏名を見ると、私が聞き覚えのある明治末期から大正・昭和初期時代に渡り、橋北地区内での有名人の名前が連っているのに驚いた。大間知円兵衛、田上嘉八郎、島金次郎、内山甚兵衛、今井芳次郎、室三郎、山田善蔵、長岡定次郎、稲垣藤兵衛、前川弥三兵衛、開亀次郎等々である。当時は「立つ鳥も落す」勢力の方々のお名前であった。それらの後継者の中には、私等の年代の方々も生存されてなければならないのに、今は全く消息が解らないのである。僅かに山田清次郎氏・笹倉虎次郎氏の二名だけ現在後継者が夫々呉服店・酒類販売店を、継続営業されているが昔の面影は無い。

私の父及び祖父は、常々私等に語っていた。時勢に乗って、或は幸運をつかんで一時的に急激に、成金になった人及び店の寿命は、短命である。一代一代と、一世代を送る事によって、亦、歴史の積み重ねによって出来た基礎は、容易に崩壊するものではない。私の家も、祖先は代々、宮大工として家業に励み、乙吉翁は、宮大工の棟梁として一歩前進し、その土台の上に音吉翁は、木材業を開業して一歩飛躍し、その飛躍の上に常太郎翁は、更に充実し、善蔵翁は、堅実に継承し、今私は、過去数代が築いた土台の上で活躍しているので、所謂戦後派の成り上がり者では決して無いのである。

そこには、歴史と伝統がある。それには、祖先が身をもって示した、質素・勤倹・質実・剛健に、地道に一歩一歩、一代一代と、ピラミッド型に積み上げることこそ肝要である。本当に後継者を愛すならば、自分の虚栄や名誉職より、亦、目先の利益より、古い伝統と暖簾・信用を後継者に残した方が為になると思うのである。前項に書いた通り、今回小池木材店の歩いて来た道程を、先代及び先々代の努力を書き残すのも、後継者への戒めの為でもある。

私の祖父及び父の時代に、業種が違っても、橋北で互いに競い合って商売していた企業で、今日尚隆々と残っている店は、現在の福田勘産業㈱と、私の小池木材㈱だけである。福田氏の家庭環境も略、私の境遇と似ている。

私は奉賛会長兼建設委員長の立場で、神社北側の玉垣造営に併せて、新しく北側の鳥居も献納する事になり、新鳥居下の正面入口に外側に向けて、大親柱二本が必要となった。当時の建設委員会全員の意見として、先代から氏子内に居住していて、現在も当氏子である者の代表として、福田勘産業㈱と小池木材㈱の二者を並列すべきであると言う意見であった。

しかし、玉垣の生命はたいへんに永い。前にも書いた通り、修理された南側玉垣に刻んであった哀れな残がいを、後継者に味あわせたくないと思い、私は、敢えて一歩さがり、氏子を代表する大法人として富山地方鉄道㈱と、地元企業として福田勘産業㈱に譲り、私の奉納柱は、西隅に、一般氏子連と共に並列してある。後継者に私の意のある処を心に銘記して置いて頂きたい。

私は決して成功者と自惚れてはいない。日本は広いもので、戦後の大変動期に成功された、松下幸之助氏、出光佐三氏、本田宗一郎氏等、世界の企業に列しておいでになる、有名な大先輩達が輩出した時代である。私如き者は足元にも寄り付けないのである。唯、祖父・父の家業を辛うじて守り抜いて来たに過ぎないのである。そして後継者に過ちを犯さないよう忠告したに過ぎないのである。六十八才ともなると老人の愚知と言われるかも知れない。